

定時制高校生の中途退学意識に関連する要因の検討

Idea of Leaving School without Completing the Course in Part-time High School.

金子 恵美子
(こども学科 講師)

伊藤 美奈子
(奈良女子大学 教授)

要旨 本研究では、A 定時制高等学校の生徒 338 名への質問紙調査から、定時制高校に通う生徒の高校中退の意識とそれに関連する要因について検討することを目的とした。(1) 高校中退の意識(高校をやめたいと思ったことがある)には学年差は見られず、性差が見られ、高校をやめたいことが「よくある」「ときどきある」と回答した生徒は男子では約 45%であるのに対し、女子では約 6 割であった。(2) 高校中退の意識は、高校での登校状況と関連しており、中学校での登校状況の良否とは関連が見られなかった。(3) 男子、女子ともに学習・進路面や特別活動での適応、授業理解度、自己評価・自己受容の低さが高校中退の意識と関連していることが明らかになったが、女子において高校をやめたいと思ったことが「ときどきある」生徒の意識は女子の「よくある」生徒、男子の「よくある」生徒、「ときどきある」生徒とは異なるものであることが示唆された。

【キーワード：定時制高校，高校中退，学校適応感，自尊感情】

1. はじめに

文部科学省(2015)によると、平成26年度に高等学校を中途退学した生徒は約5万3千人、中途退学率は1.5%であり、中途退学率がこれまで最も高かった平成8年度～平成13年度の2.5～2.6%からは減少してきているものの、現在も多くの生徒が高校入学後に中途退学しているという状況がある。特に課程別で見ると、本研究で対象としている定時制課程の高等学校では中途退学率が高く、平成26年度の全日制課程の中途退学率が1.0%であるのに対し、定時制課程では11.1%、通信制課程では5.2%となっている。また、全日制課程、定時制課程、通信制課程のいずれの課程でも1年生の中途退学率が最も高く、学年が上がるにつれて中途退学率は減少しているが、特に定時制課程では1年生で22.0%、2年生で10.2%、3年生で6.4%、4年生で3.0%と、1年生でかなり多くの中途退学者が出ており、中途退学が深刻な問題であることがうかがえる。さらに、中途退学の問題に加え、高等学校における不登校の問題も重要な課題である。高等学校における不登校生徒の割合は平成25年度、26年度と連続して減少しているが、平成26年度には約5万3千人の不登校生徒がいるという状況である(文部科学省、2015)。特に、全日

制課程における不登校生徒の割合が1.1%であるのに対し、定時制課程における不登校生徒の割合は17.0%と高い。高等学校における不登校はその後に中途退学につながっていく可能性もあり、平成26年度には不登校生徒のうち28.3%にあたる約1万5千人が中途退学となっている。こうした中途退学の理由については、「もともと高校生活に熱意がない」「授業に興味がない」「人間関係がうまく保てない」「学校の雰囲気合わない」などの<学校生活・学業不適應>が34.9%、次いで「別の高校への入学を希望」「就職を希望」などの<進路変更>が34.8%となっている。その他、さまざまな理由で生徒は中途退学をしているが、<学校生活・学業不適應><進路変更>という高校生活に対するなんらかの不適應が理由と考えられる中途退学が全体の約7割を占めており、この傾向は定時制高校でも同様である。

また、定時制課程の高等学校では、小中学校における不登校経験者や他の高等学校において不適應となった生徒も多く受け入れており、柔軟に対応していることがこれまでも指摘されている(高田、1999)。こうした過去の不登校経験や不適應経験が中途退学に関連している可能性も推測される。

高校生の中途退学の意識については、これまでに中途退学の要因と学習、生活実態に関して検討したもの(那須, 1991), 部活動加入との関連について検討したもの(松下, 2010), 中途退学の経緯やその後の意識について検討したもの(乾・桑嶋・原・船山・三浦・宮島・山崎, 2012), 北海道都市部のケース分析から高校中退の構造について検討しているもの(北大高校中退調査チーム, 2011), 中途退学者の追跡調査(東京都教育委員会, 2013)などが行われているが、定時制課程に着目して中途退学の意識を検討したものは少なく、高等学校の中でも中途退学率の高い定時制課程に着目して、生徒の中途退学の意識について検討を行うことは重要であると考えられる。

そこで、本研究では、A定時制高校に通う生徒を対象として質問紙調査を行い、高校中退に関する意識と関連する要因について検討することを目的とする。特に、高校中退の意識に関連する要因として、中学校での登校状況、高校での登校状況、高校生活への適応を測定する学校生活適応感、授業理解度、自尊感情を取り上げ、それらの要因と高校中退の意識がどのように関連しているのかについて検討を行う。

II. 方法

1. 調査方法 質問紙調査

2. 調査時期 平成21年12月～平成22年1月

3. 調査対象 都内A定時制高校生357名。そのうち回答に著しく不備のある者および25歳以上のものを今回の分析からは除外し、分析対象は338名(1年99名, 2年102名, 3年137名; 男子146名, 女子192名)となった。

Table1 学年と性別

	1年	2年	3年
男子	42 (42.4)	50 (49.0)	54 (39.4)
女子	57 (57.6)	52 (51.0)	83 (60.6)

4. 調査内容

1) フェイスシート(学年, 年齢, 性別)

2) 東京都版自尊感情尺度 伊藤(2010)の児童・生徒の自尊感情に関する22項目を用いた。この尺度は、「自己評価・自己受容」(例: 私は自分のことが好きである), 「関係の中での自己」(例: 自分のことを見守ってくれている周

りの人々に感謝している), 「自己主張・自己決定」(例: 人と違っていても自分が正しいと思うことは主張できる)の3因子から構成されており、各質問項目について「よくあてはまる(4点)」「だいたいあてはまる(3点)」「あまりあてはまらない(2点)」「まったくあてはまらない(1点)」の4件法で評定を求めた。本研究では、因子ごとに項目の合計得点を項目数で除したものを下位尺度得点として算出した。クロンバックの α 係数は、「自己評価・自己受容」が.82, 「関係の中での自己」が.77, 「自己主張・自己決定」が.78であった。

- 3) 学校生活適応感尺度 内藤・浅川・高瀬・古川・小泉(1986)の学校生活適応感尺度(6因子36項目)より「規則への態度」因子を除く5因子, 30項目を使用した。各項目について、「とてもよくあてはまる(5点)」「ややあてはまる(4点)」「どちらともいえない(3点)」「あまりあてはまらない(2点)」「まったくあてはまらない(1点)」の5件法で評定を求めた。5因子は、「学習意欲」(例: 勉強に積極的である), 「友人関係」(例: 楽しい友人関係をもっている), 「進路意識」(例: 自分に合った進路を考えている), 「教師との関係」(例: なんでも相談できる先生がいる), 「特別活動への態度」(例: クラブ(部活動), HR活動や行事などに積極的である)である。本研究では、因子ごとに項目の合計得点を項目数で除したものを下位尺度得点として算出した。クロンバックの α 係数は、「学習意欲」が.89, 「友人関係」が.88, 「進路意識」が.90, 「教師との関係」が.90, 「特別活動への態度」が.93であった。
- 4) 授業理解度 片岡(1993)の授業内容に関する項目を使用し、「よくわかる」「だいたいわかる」「半分くらいわかる」「あまりよくわからない」「ほとんどわからない」の5段階で評定を求めた。
- 5) 高校の登校状況 片岡(1993)を参考に、「ほとんど休まない」「月に1～2日」「週に1～2日」「週に3～4日」「週に5～6日」欠席の5段階で評定を求めた。
- 6) 中学校の登校状況 片岡(1993)を参考に、「ほとんど休まなかった」「月に1～2日くらい休んだ」「週に1～2日くらい休んだ」「週に3日

以上休んだ」「ほとんど休んだ」の5段階で評定を求めた。

- 7) 高校中退の意識 高校をやめようと思ったことがあるかどうかについて、「よくある」「ときどきある」「まったくない」からあてはまるものを1つ選択するよう求めた。

Ⅲ. 結果

1. 学年, 性別による高校中退の意識

学年, 性別ごとに高校中退の意識(高校をやめたいと思ったことが「よくある」「ときどきある」「まったくない」)についての回答をまとめた。

まず, 学年による高校中退の意識について検討したところ (Table2), 学年による差は見られず, 高校をやめたいと思ったことが「よくある」生徒は3年生で最もパーセンテージが高いものの, いずれの学年でも約2割であり, 「ときどきある」生徒が約35%, 「まったくない」生徒が約4~5割という結果であった。

	よくある	ときどきある	まったくない
1年	15 (15.4)	32 (33.0)	50 (51.5)
2年	16 (16.3)	36 (36.7)	46 (46.9)
3年	31 (22.3)	49 (35.3)	59 (42.5)

次に, 性別による高校中退の意識について検討したところ (Table3), 性別による差が見られ ($\chi^2(4)=9.61, p<.01$), 高校をやめたいと思ったことが「よくある」生徒の割合は男子, 女子とも約2割であったが, 「ときどきある」と回答した割合は男子の26.6%に対し, 女子は41.8%と多く, 「よくある」「ときどきある」を合わせると高校をやめたいと思ったことがある割合は, 女子のほうが約6割と半数を超えており, 男子に比べ多いという

結果であった。

	よくある	ときどきある	まったくない
男子	26 (18.2)	38 (26.6)	79 (55.2)
女子	35 (18.5)	79 (41.8)	75 (39.7)

2. 高校中退の意識と中学校の登校状況との関連

中学校での登校状況が高校中退の意識とどのように関連しているのかについて検討を行った。なお, 高校中退の意識には性別による差が見られることから, 男子, 女子それぞれについて中学校登校状況と高校中退の意識との関連を検討することとした (Table4)。

中学校での登校状況に対する回答をもとに, 欠席をほぼしていない状態(「ほとんど休まなかった」「月に1~2日くらい休んだ」)を「中学登校良好」, 週1日以上欠席しており, 不登校傾向または不登校であったと考えられる状態(「週に1~2日くらい休んだ」「週に3日以上休んだ」「ほとんど休んだ」)を「中学登校不良」と分類して, 高校中退の意識との関連を検討した。高校をやめたいと思ったことが「まったくない」と回答している生徒の割合は, 男子, 女子のいずれにおいても「中学登校良好」の生徒のほうが「中学登校不良」の生徒に比べ約1割多いが, χ^2 検定を行った結果, 男子, 女子のいずれにおいても中学校での登校状況による差は見られなかった。

3. 高校中退の意識と高校の登校状況との関連

次に, 高校の登校状況と高校中退の意識との関連について検討を行った。中学校での登校状況の分類と同様に, 高校の登校状況の回答について, 欠席をあまりしていない生徒(「ほとんど休まない」「月に1~2回」)を「高校登校良好」, 週1日以上

高校中退意識	男子		χ^2 値	女子		χ^2 値
	中学登校良好	中学登校不良		中学登校良好	中学登校不良	
よくある	15 (17.6)	10 (18.2)	n.s.	20 (16.0)	14 (24.1)	n.s.
ときどきある	19 (22.4)	17 (30.9)		51 (40.8)	25 (43.1)	
まったくない	51 (60.0)	28 (50.9)		54 (43.2)	19 (32.8)	

欠席している生徒（「週に1～2日」「週に3～4日」「週に5～6日」）を「高校登校不良」と分類し、 χ^2 検定を行った（Table5）。その結果、男子、女子のいずれにおいても、5%水準で高校の登校状況による有意差が見られた（男子 $\chi^2(2)=7.49$, $p<.05$ ；女子 $\chi^2(2)=6.70$, $p<.05$ ）。

男子においては、「高校登校良好」な生徒、「高校登校不良」な生徒のいずれでも高校をやめたいと思ったことが「よくある」生徒は約2割とほぼ同様の割合であったが、「ときどきある」生徒が「高校登校良好」な生徒では約2割であるのに対し、「高校登校不良」な生徒では約4割と多く見られた。また、高校をやめたいと思ったことが「まったくない」生徒は「高校登校良好」な生徒では61.5%であるのに対し、「高校登校不良」な生徒では36.4%と少なかった。高校での登校状況が良好な生徒では高校をやめたいと思ったことが「まったくない」生徒の割合が多く、高校での登校状況が不良な生徒では高校をやめたいと思ったことが「ときどきある」という生徒の割合が多いという結果であった。

一方、女子においては、高校をやめたいと思ったことが「よくある」生徒は「高校登校良好」な生徒では16.3%であるのに対し、「高校登校不良」な生徒では30.0%と多く、高校をやめたいと思ったことが「ときどきある」生徒も「高校登校良好」な生徒では約4割であるのに対し、「高校登校不良」な生徒では約5割と多く見られた。また、高校をやめたいと思ったことが「まったくない」生徒は「高校登校良好」な生徒では43.8%であるのに対し、「高校登校不良」な生徒では20.0%であった。女子においては、登校状況が不良な生徒では高校をやめたいと思ったことが「よくある」「ときどきある」のいずれの割合も、登校状況が良好な生徒に比べ

多いという結果が見られた。

4. 高校中退の意識と自尊感情、学校生活適応感、授業理解度との関連

次に、高校中退の意識と関連する要因として、自尊感情、学校生活適応感、授業理解度に着目し検討を行った。自尊感情、学校生活適応感、授業理解度について、高校中退意識（「よくある」「ときどきある」「まったくない」）による相違を検討するため、男子、女子それぞれについて一要因の分散分析を行った。男子の結果をTable6-1、女子の結果をTable6-2に示した。

男子では、学校生活適応感5因子すべての「友人関係」($F(2, 141)=5.19$, $p<.01$)、「教師との関係」($F(2, 141)=9.19$, $p<.01$)、「学習意欲」($F(2, 140)=4.53$, $p<.05$)、「進路意識」($F(2, 141)=3.32$, $p<.05$)、「特別活動への態度」($F(2, 141)=8.44$, $p<.01$)、また授業理解度 ($F(2, 122)=11.34$, $p<.01$)、自尊感情3因子すべての「自己評価・自己受容」($F(2, 141)=5.97$, $p<.01$)、「関係の中での自己」($F(2, 140)=4.75$, $p<.05$)、「自己主張・自己決定」($F(2, 142)=3.19$, $p<.05$)において有意差が見られた。Tukey法による多重比較の結果、学校生活適応感の「友人関係」「教師との関係」「学習意欲」「特別活動への態度」では、高校をやめたいと思ったことが「よくある」生徒のほうが「まったくない」生徒に比べ得点が低かった。授業理解度は、高校をやめたいと思ったことが「よくある」生徒、「ときどきある」生徒の得点のほうが「まったくない」生徒より低いという結果だった。また、自尊感情の「自己評価・自己受容」「関係の中での自己」では、高校をやめたいと思ったことが「よくある」生徒のほうが「まったくない」生徒に比べ得点が低かった。

Table5 高校中退意識と高校登校状況との関連

人 (%)

高校中退意識	男子		χ^2 値	女子		χ^2 値
	高校登校良好	高校登校不良		高校登校良好	高校登校不良	
よくある	19 (17.4)	7 (18.2)	7.49*	25 (16.3)	9 (30.0)	6.70*
ときどきある	23 (21.1)	14 (42.4)		61 (39.9)	15 (50.0)	
まったくない	67 (61.5)	12 (36.4)		67 (43.8)	6 (20.0)	

* $p<.05$

定時制高校生の中途退学意識に関連する要因の検討

女子では、学校生活適応感の「学習意欲」(F(2, 188) = 12.65, p<.01), 「進路意識」(F(2, 187) = 4.73, p<.05), 「特別活動への態度」(F(2, 180) = 5.84, p<.01), 授業理解度 (F(2, 178) = 7.77, p<.01), 自尊感情の「自己評価・自己受容」(F(2, 184) = 4.58, p<.05) において有意差が見られ、男子で有意差が見られた学校生活適応感の「友人関係」「教師との関係」、自尊感情の「関係の中での自己」「自己主張・自己決定」では有意差は見られなかった。Tukey法による多重比較の結果、学校生活適応感の「学習意欲」「特別活動への態度」、

授業理解度では、高校をやめたいと思ったことが「よくある」生徒のほうが「ときどきある」生徒、「まったくない」生徒に比べ得点が低かった。学校生活適応感の「進路意識」では、高校をやめたいと思ったことが「よくある」生徒のほうが「ときどきある」生徒より得点が低かった。また、自尊感情の「自己評価・自己受容」「関係の中での自己」では、高校をやめたいと思ったことが「よくある」生徒のほうが「まったくない」生徒に比べ得点が低かった。

Table6-1 高校中退意識による諸得点の一要因分散分析 (男子)

平均 (標準偏差)

	よくある	ときどきある	まったくない	F値	多重比較
学校生活適応感					
「友人関係」	2.58 (.99)	2.97 (.86)	3.25 (.97)	5.19**	よくある<まったくない
「教師との関係」	2.38 (.84)	2.81 (1.01)	3.22 (.87)	9.19**	よくある<まったくない
「学習意欲」	2.10 (.82)	2.34 (.80)	2.63 (.85)	4.53*	よくある<まったくない
「進路意識」	2.87 (1.18)	2.77 (.97)	3.27 (1.06)	3.32*	
「特別活動への態度」	1.97 (1.16)	2.56 (1.11)	2.95 (1.01)	8.44**	よくある<まったくない
授業理解度	2.73 (1.03)	3.03 (.88)	3.67 (.90)	11.34**	よくある, ときどきある <まったくない
自尊感情					
「自己評価・自己受容」	2.07 (.62)	2.30 (.47)	2.50 (.58)	5.97**	よくある<まったくない
「関係の中での自己」	2.55 (.58)	2.79 (.51)	2.92 (.53)	4.75*	よくある<まったくない
「自己主張・自己決定」	2.67 (.63)	2.68 (.52)	2.91 (.54)	3.19*	

**p<.01 *p<.05

Table6-2 高校中退意識による諸得点の一要因分散分析 (女子)

平均 (標準偏差)

	よくある	ときどきある	まったくない	F値	多重比較
学校生活適応感					
「友人関係」	3.03 (.96)	3.22 (.85)	3.43 (.78)	n.s.	
「教師との関係」	2.62 (1.33)	2.83 (.89)	3.00 (.94)	n.s.	
「学習意欲」	1.71 (.83)	2.43 (.85)	2.57 (.87)	12.65**	よくある< ときどきある, まったくない
「進路意識」	2.84 (1.29)	3.51 (.93)	3.22 (1.14)	4.73*	よくある<ときどきある
「特別活動への態度」	2.15 (1.29)	2.71 (1.12)	2.94 (1.00)	5.84**	よくある< ときどきある, まったくない
授業理解度	2.48 (.87)	3.13 (.94)	3.23 (.93)	7.77**	よくある< ときどきある, まったくない
自尊感情					
「自己評価・自己受容」	2.06 (.58)	2.18 (.59)	2.39 (.57)	4.58*	よくある<まったくない
「関係の中での自己」	2.93 (.53)	2.90 (.51)	2.92 (.50)	n.s.	
「自己主張・自己決定」	2.95 (.71)	2.69 (.51)	2.79 (.55)	n.s.	

**p<.01 *p<.05

IV. 考察

本研究では、定時制高校に通う生徒の高校中退の意識とそれに関連する要因について検討することを目的とした。

まず、学年、性別ごとの高校中退の意識について検討したところ、学年による差は見られず、性別による差が見られた。高校をやめたいと思ったことが「よくある」生徒の割合は男子、女子ともに約2割とほぼ同じであるが、「ときどきある」と回答した割合は女子のほうが男子に比べて多く、高校をやめたいと思ったことが「よくある」「ときどきある」と回答した生徒を合わせると、女子では高校中退を考えたことがある生徒が約6割となり、多くの女子が高校中退を考えた経験があることが示唆された。一方で、男子では高校をやめたいと思ったことが「まったくない」と回答した生徒が半数以上であり、高校中退の意識が男子と女子では異なることが示唆された。

次に、高校中退の意識に関連する要因を検討するため、中学校の登校状況、高校の登校状況、学校生活適応感、授業理解度、自尊感情に着目して、男子、女子それぞれにおいて検討を行った。その結果、男子、女子ともに高校中退の意識に中学校の登校状況による差は見られず、高校の登校状況による差が見られ、高校中退の意識には中学校の登校状況ではなく、高校の登校状況が関連していることが示唆された。このことから、中学校で登校状況が良好ではなく、不登校傾向や不登校状態にあったかどうかは高校における中途退学の意識とは直接関連はせず、高校における登校状況がどうかということと中途退学の意識が関連しており、中学校で登校状況が良好であった生徒でも高校では中途退学を考えることがありうるといえる。そのため、高校においても生徒の登校状況に注目し、早い段階で対応していくことが重要であると考えられる。また、高校での登校状況が良好な生徒であっても、高校をやめたいと思ったことが「よくある」生徒が男子、女子ともに約2割いることが明らかになり、登校状況には表れないが高校中退の意識を持っている生徒にも目を向けていくことが必要であると思われる。

さらに、高校中退の意識に関連する要因として、学校生活適応感、授業理解度、自尊感情に着目して検討したところ、男子では学校生活適応感の「友

人関係」「教師との関係」「学習意欲」「進路意識」「特別活動への態度」、授業理解度、自尊感情の「自己評価・自己受容」「関係の中での自己」「自己主張・自己決定」のすべてが、女子では学校生活適応感の「学習意欲」「進路意識」「特別活動への態度」、授業理解度、自尊感情の「自己評価・自己受容」が高校中退の意識と関連していることが示唆された。男子、女子ともに、学校生活適応感の「学習意欲」「進路意識」「特別活動への態度」、授業理解度、また自尊感情の中でも自分を好きである、自分に満足しているといった項目から成る「自己評価・自己受容」については、高校をやめたいと思ったことが「よくある」生徒の得点が「まったくない」生徒に比べ低いという結果が見られ、学習意欲や特別活動など高校での主たる活動への適応状況が低い生徒のほうが高校中退を意識していることが示唆された。また、特に女子では、学校生活適応感の「学習意欲」「進路意識」「特別活動への態度」、授業理解度において、高校をやめたいと思ったことが「よくある」生徒と「ときどきある」生徒の間にも差が見られ、女子においては高校をやめたいと思ったことが「よくある」生徒と「ときどきある」生徒では学校生活への適応状況が異なり、適応状況は良好であっても高校をやめたいと思うことが「ときどきある」と感じている可能性が考えられる。女子では、男子に比べて高校をやめたいと思ったことが「ときどきある」生徒の割合が多いが、「ときどきある」を選択する生徒の状況が男子と女子とでは異なっていることが推測される。

また、高校生活の重要な側面の一つであると考えられる学校生活適応感の「友人関係」「教師との関係」、自尊感情の「他者との関係性志向」「自己主張・自己決定」については、女子では高校中退の意識による有意差が見られなかった。これについては、男子、女子の平均得点を見てみると、学校生活適応感の「友人関係」「教師との関係」、自尊感情の「関係の中での自己」「自己主張・自己決定」のいずれについても男子に比べて女子の特に高校をやめたいと思ったことが「よくある」生徒の平均得点が高い傾向にあった。このことから、女子のほうが友人関係や教師との関係など全体的に人間関係面での適応が良好であり、高校中退の意識の高低との関連が見られなかったものと考えられる。

本研究では、定時制高校生の中途退学の意識には男女差が見られ、女子のほうが中途退学を意識する生徒が多いことが明らかになった。しかし、女子においては高校をやめたいと思ったことが「よくある」生徒と「ときどきある」生徒では高校生活への適応が異なり、「ときどきある」生徒の適応が「よくある」生徒に比べると高いこと、男子ではそのような差が見られないことから、女子において高校をやめたいと思ったことが「ときどきある」生徒の意識は女子の「よくある」生徒、また男子の「ときどきある」生徒の意識とは異なるものであると考えられ、そうした点に配慮して支援していくことが必要になると思われる。また、定時制高校における生徒の中途退学の意識は、中学校の出席状況ではなく高校の出席状況と関連が見られること、また自己評価や自己受容の高さ、高校生活での学習・進路面、特別活動における適応の高さと関連していることから、中途退学への予防として、生徒の出席状況に注目して早めの対応を行っていくことや、学習・進路面での支援の充実、生徒の自己評価、自己受容を高める関わりを行っていくことが重要であると考えられる。

究. 1997, 30, p.207-215.

松下眞治. 高校中途退学と部活動加入との関連についての一考察. 国立青少年教育振興機構研究紀要. 2010, 10, p.129-136.

文部科学省. 平成26年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について. 2015

内藤勇次・浅川潔司・高瀬克義・古川雅文・小泉令三. 高校生用学校環境適応感尺度作成の試み. 兵庫教育大学研究紀要. 1987, 7, p.135-145.

那須光章. 高校中途退学者の中途要因と学習, 生活の実態に関する研究. 滋賀大学教育学部紀要 人文科学・社会科学・教育科学. 1991, 41, p.87-106

高田晃治. 高等学校中途退学者のアイデンティティ発達に関する一考察. 心理臨床学研究. 1999, 16, p.604-610.

東京都教育委員会. 「都立高校中途退学者等追跡調査」報告書. 2013

山口晴久. 定時制高校生の学習, 進学動機に関する調査. 和歌山大学教育学部紀要 教育科学. 1992, 41, p.151-160.

文献

北大高校中退調査チーム. 高校中退の軌跡と構造(中間報告)ー北海道都市部における32ケースの分析ー. 公教育システム研究. 2011, 10, p.1-60.

乾彰夫・桑嶋晋平・原未来・船山万里子・三浦芳恵・宮島基・山崎恵里菜. 高校中退者の中退をめぐる経緯とその後の意識に関する検討ー内閣府調査(2010)の再分析ー 首都大学東京教育科学研究. 2012. 26, p25-84.

伊藤美奈子. 「自尊感情や自己肯定感に関する研究」報告書. 慶應義塾大学・東京都教育委員会(東京都教職員研修センター), 2010

片岡栄美. 学校世界とスティグマー定時制高校における社会的サポートと学校生活への意味付与. 関東学院大学人文科学研究所報. 1993, 17, p.51-93.

小林正幸・仲田洋子. 学校享受感に及ぼす教師の指導の影響に関する研究. カウンセリング研